藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

蚤（のみ）の市
～ベルギー編⑦～

市庁舎前広場の蚤の市

以前、ロンドンを旅した時、フリーマーケットについて書いた。私はその時まで「フリー」は「FREE」（自由）だと思っていたが「FLEA」（蚤）が正しいと知った。「蚤の市」とは「古物市」のこと。パリ北部の地下鉄駅前で古くから毎週一回開かれている古物市の名前が一般にも使われるようになったという。

ロンドンのフリーマーケットは有名で、九つの大きなフリーマーケットがガイドブックにも紹介されている。場所によって売るものが異なるが、最近は骨とう、アンティーク小品、絵画などに限らず、食料品、衣類、花、日用雑貨品も売られ、庶民のスーパーマーケットにもフリーマーケットが開かれていた。妻は蚤の市が好きで、ロンドンでは短い滞在期間にもかかわらず二回も足を運んだほどである。

アントワープの場合、陶器、骨とう、絵画の店が目立つ。ヨーロッパの中心という地域性からか、イギリスのボーン・チャイナやオランダのデルフト焼きもある。

蚤の市での買い物の面白さは値段交渉だ。写真のコルク栓のオリーブオイルなどを入れると思われるデルフト焼きの瓶を見つけ、店番らしいおじいさんに「ハウ・マッチ？」と聞くと「十二ユーロ」と言う。両手を出し「テン・ユーロ、OK？」と言うと、すぐうなずき、商談は成立した。

白とブルーが特徴のデルフト焼き

別の店で買っていた妻に報告すると「安く買うコツは自分から値段を言わないこと。もう少し安くなったかもしれないよ」と言う。妻は下松の愛のバザーにも長く関わり、この道のベテランである。

妻が買ったのはふたのない砂糖入れのような壺（二枚目の写真の右）。ふたのないものを売る方も売る方だが、買う方も買う方だ。妻は「デルフト陶器の美しさが味わえるからこれで十分」と涼しい顔。確かに蚤の市的買い物といえるかもしれない。

かくして、オランダ名物のデルフト焼きをベルギーの蚤の市で買い、我が家の土産としたのである。なお、私が買った瓶であるが、オランダで風車を見に行った時にあったアンティーク店で、同じものが十五ユーロであった。私も捨てたものではないと一人ほくそ笑む。妻は黙ってここでもう一つ、私の誕生月が書かれたボーン・チャイナのロイヤル・アルバートの小振りのティーカップ（写真）を買った。多分、来年の私の誕生祝いはそれになるのであろう。

1月と書かれたティーカップ